

浮世絵大事典

国際浮世絵学会編 絵師や作品・画題だけではなく、彫摺・様式・風俗・芸能など最新の研究成果を盛り込み幅広く収録し解説。絵師・画家は江戸期から近現代まで網羅。浮世絵の膨大な情報を一冊に簡便にまとめた初の事典。特価二六二五〇円(08年10月末日まで)定価二九四〇〇円

(価格は税込)

家紋の事典

高澤 等著 千鹿野 茂監修 家紋の変遷や県別の分布と紋形のバリエーションなど画像の見方を示し、家紋データを元に二五三種三〇〇〇点を収録定価四二〇〇円

能楽史年表 近世編上巻

鈴木正人編 序文表 章 古代・中世編に続き、近世編(全三巻)を刊行する。近世編上巻では慶長六年から貞享四年まで五六〇〇余項目を採録した定価一五七五〇円

植物の漢字語源辞典

加納喜光著 五〇〇語の植物漢字を収録し、その語源・字源について漢字本来の意味を詳細に解説。古代人が植物のイメージを字形に託した源流を辿る定価三九九〇円

CD-ROM版 くずし字解読用例辞典

山田契治・柴山 守編 ロングセラーのくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト完成◆詳細内容見本進呈◆価格二九四〇〇円

東京堂出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746
http://www.tokyodoshuppan.com

懐風藻

日本の自然観はどのように成立したか
辰巳正明編 A5世 750円
極めて東アジア的な日本人の季節感。そのルーツを懐風藻にみる。

万葉集の 様式と表現

伝達可能な造形としてのへ心
大浦誠士 A5世 1320円
表出・伝達・享受という歌表現のシステマに迫り、万葉集を読み解く。

萬葉集全歌講義

第四巻(巻7・8) 全十巻
阿蘇瑞枝 謝世 14700円
国語学考古学ほか諸分野の研究成果をふまえた総合的古代研究。

源氏物語 表現の理路

今井上 A5世 11550円
作品を丁寧に読み込み、従来の読みを問い直し、実証する野心得。

紫式部集大成

実践女子大学本・瑞光寺本
陽明文庫本 B5世 15700円
久保田孝夫・廣田収・横井孝編著
重要伝本の影印・翻刻・解題のほか、豊富な写真や古地図も収録。

古今和歌集論

万葉集から平安文学へ
宇佐美昭徳 A5世 785円
歌の分類や、韻律、先行歌利用などから古今和歌集を新たに解析。

伊勢物語 古注釈大成

第三巻 A5世 10280円
片桐洋一・山本登朗責任編集
伊勢物語の主要な古注釈を体系的に編集、翻刻した決定版。

『古事談』を 読み解く

浅見和彦編 A5世 13125円
文学・歴史分野で活躍の20人が書き下ろした、古事談初の本格論集。

軍記物語原論

松尾重江 A5世 9450円
軍記とは何か、何が鎮魂を果たすのか。何が記憶を物語に変えるのか。

文学海を渡る

梅光学院大学公開講座論集
佐藤泰正編 四才世 1500円
海外から日本に、日本から海外へ、世界で広く読まれる文学を考究。

消された漱石

明治の日本語の探し方
今野真一 謝世 9550円
漱石の日本語を徹底解剖、明治期日本語のあり方をうかがう一冊。

定価一六〇〇円 本体一五二四円

笠間書院

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-2-3 電話03-3295-1331
http://www.kasamashoin.jp/ ファクス03-3294-0996 (価格は税込)

国文学 8

特集 文学の中の死

平成二十年八月十日発行(毎月一回)十月発行(第五十三巻)十一月八月月号
昭和三十一年九月十五日号 第三種郵便物認可 (通巻七十七号)

第五十三巻十二号 二〇〇八年八月号

国文学 8

日本語・日本文学・日本文化

解釈と教材の研究

特集

文学の中の死

- ◆『記紀』における死の意味——死と生産の女神 萩野了子
- ◆時代・歴史小説の〈死〉 志村有弘
- ◆現代文学は「死」をどう扱うのか 太田哲男

◆作家が描いた死

- 坂口安吾 鈴木紗耶香 宮澤賢治 竜口佐知子
- 大岡昇平 立尾真士 三島由紀夫 田村景子

学燈社

ISSN 0452-3016
雑誌 03787-8



4910037870889
01524

Printed in Japan

心意伝承 — 遊働世界に生きる —

本莊雅一
ほんじょうまさかず

中洲と青山のコンステレーション

川の中洲にテントを張って濁流に飲み込まれる事故が、毎年のように夏にはニュースになるが、やってみたくなる気持ちは分かる。中洲は特殊な感興をもよおす空間である。日常の世界からは隔絶され、鳥の声や葉ずれの音以外には水のせせらぐ静寂の間に拉致される。川の流れを見ていると、こちらが浮島のとりことなって、どこまでもどこまでも流されて行くような錯覚を覚えるのである。

危険な中洲でなくとも、小高くなった河原にテントを張ってキャンプしたがる人々は、こうした空間遊働を体感したがる心意伝承にとらわれていると言っている。

前回の、山が水上に漂流する風景とは視点が変わり、

第十一回 山水遊泳を映す生活② 青山常運歩

自身が鳥とともに浮遊する感覚である。現在の生活の中で無意識にこんな体感を味わっていること自体、いつしか私も自覚できなくなっていたのだが、次の記事がきっかけで、日常生活を支えている私たちの体感の妙を、垣間見た気がしたのである。

故、出雲に到りて、大神を拜み訖へて還り上ります時に、肥河の中に黒き巢橋を作り、假宮を仕へ奉りて坐さしめき。爾に出雲國造の祖、名は岐比佐都美、青葉の山を飭りて、其の河下に立てて、大御食獻らむとする時に、其の御子詔言りたまひしく、「是の河下に、青葉の山の如きは、山と見えて山にあらず。若し出雲の石祠の曾宮に坐す葦原色許男大神を以ち伊都玖祝の大廷か。」と問ひ賜ひき。爾に御伴に遣はさえし王等、聞き歡び見喜びて、御子を

ば檣櫓の長穗宮に坐せて、驛使を貢上りき。
(古事記中巻垂仁天皇条本牟智和氣王の項)

べつに道元の「青山常運歩」と関連させようなどとしていたわけではないが、ここから「青山」の關係する伝承や祭祀が気になり始め、集めだしたのであった。私が、というより、上原輝男とその門人の中でちよつとしたブームになった。なんかすごい伝承だぞこれは！と、上原と六名ほどの研究会生たちは皆興奮した。なぜそんなに感激したのか、引用箇所からもう少しさかのぼって訳してみる。

垂仁天皇の皇后沙本毘賣命が、兄沙本毘古王にそのかされて、天皇暗殺を試みるが、夫への情愛に負けて失敗。天皇は討伐軍を差し向け、沙本毘古王は「稻城」にたてこもる。沙本毘賣命も兄と行動を共にし、「稻城」を焼いて最期の時を迎えるに先立ち、産んだ皇子を天皇に渡す。その皇子は「火中に生まれた」とされ、本牟智和氣王と名付けられる。ところが髭が胸まで伸びるほど成長しても全く言葉が話せない。ある時父天皇の夢に、出雲の大神の祟りとお告げがあった。早速伴人を添えて、皇子を出

雲の大神のもとへ参拝させた。都へ帰還するにあたって、地元民たちが肥河で仮宮を設営し（おそらくは、中洲に渡れるように丸太か何かで細長い筏状の橋を渡したのだろう）、河下側には青葉の山の造り物をつくって、皇子を歓待した（青葉の山の設置場所が、中洲なのか河原なのかは不明）。皇子はその青葉の山を見て、アシハラシコオホの祭祀空間を觀た、と、初めて言葉を発した。伴人たちは皇子を檣櫓の葉で葺いた宮に住まわせて、父天皇のもとへ報告の使いを出した。

私たちがこの記事に触れたのは、「神のお告げ」の事例を集めて、日本人の生活行動を決定づける心意心象を探っている時であった。

この事例自体は典型的な神託とはかけ離れているが、少なくとも神秘の世界を觀たと述べている点で、日常会話は次元を異にしている。しかもろうあ皇子の発言という奇跡を表してもいる。お告げとは形式が違って、神威の顕れには違いない。神威示現によって、状況が転換する。いや、状況転換そのものが、神威示現なのではなかったか。そんな風に鼻息荒く、私たちの思考は進んでいった。

ともかく、青葉の山の飾り物と、川の中洲、という取り合わせがヒントになりそうであった。類例を集めることで、日本人がどんなイメージ世界を大事にしているか、といったことが見えてくるだろうと期待した。

今にして思えば、青山と、ほかの空間構成物との連続構造、それによって私たちが感じ取ってしまう世界転換の具体像を、つかまえようとしていたのであった。

トランスメーション 世界転換は物の生命力を思い知ること

正月十八日に行われる石清水八幡宮の青山祭。これは八幡宮の鎮座する男山のふもと、頓宮の前に、上から見たら八角形になるよう、榊数千本を立てて青垣を構築する。一辺だけ、中に出入りできるようにあけられていて、内部で儀礼が行なわれる。

この青山がつくられている頓宮は、山城国と河内国との境界という設定であり、それはつまり男山と、その北側の天王山との間で合流する桂・宇治・木津三川合流の中洲という設定でもあるらしい。したがって青山の祭祀場は、中洲を見立てていることになる。なるほど、頓宮境内は神社によくある玉砂利ではなく、砂が敷きつめら



熊野速玉大社御船神事 お旅所

れている。河中の砂洲で祭祀を行っていた名残か、とも思ってしまった。

一〇月一六日の熊野速玉大社御船神事。速玉大社のご神霊を熊野大橋のたもとから神幸船に遷して、熊野川を北側に遡行する。川中の御船島を三周してから、神社がある側の河原に乗り入れ、ご神霊をお旅所に遷して祭祀を行なう。このお旅所というのが、杉の葉枝で「かまくら」のような形に盛られたもので、表面は白い幕を張られている。神官一人は入れるようになっており、ご神霊の母胎かと思えた。

この青山は河原のほうだが、ひよっとすると本来は川中の御船島で行われていたかもしれない。ただ岩が隆起したような島で、上陸は難しそうだ。三周する船たちに向かって、一人の神官が、「神子（巫女）」二名だけ従えて祝詞をあげたり扇で招いたりしていた。

四月七日の美保関青柴垣神事となると、コトシロヌシ神の国譲り神話をなぞる演出もあってか、船に青柴垣を作る。この場合は笹で葺いて、四隅の柱に榊を立てるといふもの。

青柴垣の中には「一年神主さん」と尊称される氏子代表の頭人が、厳しい精進潔斎を経て断食までし、ほとん



石清水八幡宮 青山祭頓宮



美保神社青柴垣神事

ど神がかりとなった状態で乗り込む。海上を渡り、再び上陸した後は美保神社で奉幣神事を行ない、役割を終える。

神話では、国譲りをしたあとコトシロヌシ神が海中に去るといふ筋である。具体的には、古事記の場合は船を踏み傾け、「天の逆手あまのさかてを青柴垣に打ち成して」隠れる。日本書紀は、海中に青柴垣を作り、舟べりを踏んで去ったと語る。細部の違いを捨象してしまえば、青山それ自体が海と融合したイメージで、そこは神霊の宿る特別な領域であるという心意を、伝承しているのである。

それを、こうした神事がコトシロヌシ神の死を再現したものであるというふうな文芸的に付会説明したり、海の霊力を頭人が受けて土地にもたらすとか、伝承された祭祀形式の意味を、何らかの人間生活への「効果」に結び付くように解釈するのは、結局は現代人の思想や価値観や常識に迎合させるように訳しているだけになろう。

信仰・信条としてはそれもよいだろうが、それだけでは、本当に我々自身が心底受けとめ、伝えてしまっているのが何であるのかは、わからないままにならないだろうか。

ここまでの事例を見てわかるのは、青山の位置が中洲か河原か船の上か海上か、といった、座標自体はどうで

水死体が流れ着くところ

ここまでのたどってきた祭祀祭礼では、青山のありかは見立てられた中洲であったり、頓宮とんみやすなわち頓の宮であったり、お旅所、特設船のたぐいで、「かみさま」にとつても非日常的で臨時の格別な場面のごとく伝えられている。が、それを額面通り、臨時の特殊状況と受け止めてよいのだろうか。

たとえば和歌山県の熊野本宮大社は、熊野川に開かれた谷間に鎮座する以前は、その熊野川の中洲にあった。たびたびの流失に遭い、とくに明治二二年の大洪水のあと、現在の社地に移されたらしい。

旧社地である中洲は、現在大斎原おおのけはらと呼ばれ、ゲートボールや花見を楽しむ場所となっている。現地でもらった観光パンフレットに、「青山祭か」と思われる写真があったが（悠久の熊野三山「熊野三山協議会発行」）、よく見たら修験者たちによる探灯護摩であった。が、素朴トランスフォーメーションに考えて、青山に衆人の気持ちを集めての、神威カミイ発動には違いないのである。

あるいはこれは仏教系の法事であり、神事とは区別しなければならぬ、と考える向きもあるかもしれない。仏教は高度な教義や哲理に支えられて心身の修行をする

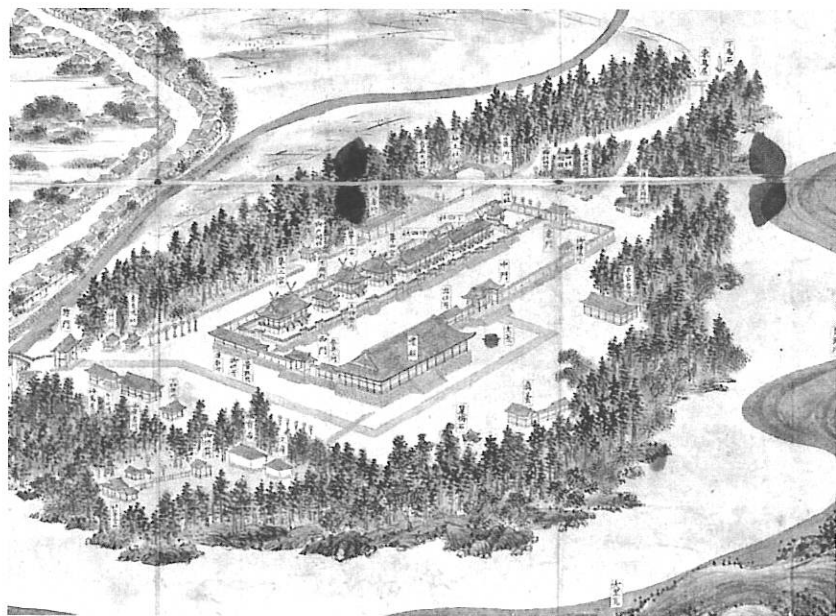
もよいのだということである。と云っては語弊がある。ともかく水との縁があり、不動の場所などといった固定イメージを伴わないことが分れば、細かな違いはどうでもよい。

やはり、「青山常運歩」のイメージに収斂されてくるように思われるのである。禅語など知らなくても、誰もが抱く共同イメージで、それを祭祀によって具体化したにすぎない。

「青山」という生命力の盛り上がりはまるで、みずみずしい世界を常に浮遊しているかのようだ。いや常にみずみずしさをたたえ、流動しているようであるのが、盛り上がりがある生命力なのである。

地動説とか天動説とかいうのは教科書で習った知識であるが、常にこの身が宇宙空間の未知にさらされ続けていると想像した瞬間、身のまわりの物や大地そのものが、無機物ではなく宇宙の流れに洗われ続けるわが肉体と同様、何とか盛り上がりよう存在しようかと必死にもがく、生命力となる。「なんかすごいことだ」と実感してしまう。

ただ単に「存在する」ために、私たちはどれほど莫大なエネルギーを費やしているか、全く想像を絶するのである。



熊野本宮大社古絵図（部分）熊野本宮大社蔵

のに対して、神道は自然まかせて教育性の乏しい、単なる風俗であるから混同すべきではないと。

その通りと認めたとして、だからこそ自然信仰の神事には、人々の偽りのない、正直な心意心象風景が現われてくる、格好の取材の場となるのである。また仏事にかかわる人々も、すべてが神事仏事を峻別して臨んでいるわけでもないで、心性取材目的の立場からは、とくに敬遠すべきものでもない。むしろ修行目的の明確な仏事と、素朴な自然崇拜神事との違いを捨象し、共通性を見つめれば、より純度の高い心意心性が蒸留される。

話を本筋に戻すと、要するに河原や中洲のような水陸の輪郭がいまいで危険な境界領域こそが、本来神仏の常駐するところであった。あるいは神仏の常駐を感じ取れるような霊威あるところが、結果的に中洲のような水陸の境界領域であったというべきかもしれないが。

境界というところですぐに思いつくのは、賽さいの河原説話である。

死んだ子どもは極楽往生できずに冥土の河原に集められる。つまり現世と冥界の境界領域として人々の意識世界に立ち表われたのが、河原だったわけだ。

そこで子ども達は、父母を恋うなら、と、小石で塔を築かせられる。しかし作る途中で鬼が来て壊す。その繰

り返しのうちに地藏菩薩が現われて子どもを救うという、ちっとも救われないお話だ。救うのならさっさと救えよ、と言いたくなる。まして親に殺されてしまった幼な子たちの場合は一体何となるのだろうか。

ともかく、現代人がキャンプやデートコースにする河原を、かつての日本人は神仏の領有する場として、かつ人間的な都合の枠を超えた理不尽な世界として発想している。なぜなのだろうか。

郡司正勝の『童子考』（二九八四年 白水社）に、一つの手がかりが示されていた。中洲とは土砂や植物遺体が堆積するだけではなく、人の水死体も流れ着くところであると。

平治の乱で捕らえられた源頼朝少年が伊豆の蛭ヶ小島に流されたという話は有名だ。具体的には静岡県田方郡韮山町を流れる狩野川の中洲であるらしい。大蛭島・小蛭島・和田島とあって、「頼朝の流謫地であったのも、流人は、もともと生きる屍しかばねとしての意を負うものであった。河原の意でもあったのは、死者が集まる場所であったからである。多くの念仏聖たちは、戦国の日には、死骸をここに集めては焼き、念仏修行を怠らなかつた。」

（二三二頁）と指摘する。
ちように「こうした現象は現代人とは一見無縁と思え

るかもしれないが……」と書きかけたところに、ミャンマーのイラワジ川河口周辺をサイクロンが直撃し、六〇キロ上流までも洪水・浸水被害が広がり、数百万人が被災し、五万人以上の死亡者・行方不明者が出たという、衝撃のニュースが全世界を駆けめぐった。

川には無数の遺体が浮かび、腐臭を放っているという。現代人とは無縁どころか隣り合わせであるというところを、ことさら主張するまでもなくなった。

そう感慨に浸っているうちに中国四川省の大地震が起きた。

降ってわいたような二つの大事変に、メディアも沸騰している。当然情報享受者の五感に訴えることはできないから、報道する側にとつての勝負どころは、いかに日本人の心意伝承にアピールするか、なのである。

まだ救出されていない生き埋めの子どもたちの表情や手足の映像が流れる。救助しようとする人が間近にいるとはいえ、倒壊したコンクリートの隙間に埋もれ、余震は続く。つまりまだギリギリの下にいるも同然の人々。その人たちの目には、せつないような命の輝きが瞬またたいている。見る人々の心を打ち、同じ思いをだれにも抱かせる神の光というべきか。すなわち、その命をこの世に生かしたい、と思わせる光である。まさしく胎児と目が

あつてしまったようなものである。救出したい、という使命感の根底には、この命を産み出したという情念が脈打っている。救出者が男子の身ではあつても。

と、日本のメディアが紡ぎだす物語に触れて、私たちはだいたい以上のような感興をもよおす。事実を枉げて報道していると言いたいのではなく、事実の編集の仕方が日本人好みだということである。

閑話休題。

中洲や河原に住まう者とは水死体であり死者の亡魂であるというのが、古人にとつては常日頃から目をそむけることのできない現実であつた。

死んだ幼児は賽の河原に集められて苦役を強いられ、罪人は生ける屍として中洲に封じられる。かとおもえば貴人が川の中洲で饗応を受け神聖世界のヴィジョンを得たりもする。実際、神霊の鎮座地ともなる。悲しいような、神々しいような、複合した世界である。

いや、これは複合なのだろうか。

古語で「かなし」とは「愛し」のことである。悲哀と慈愛は未分化な一つの感情であつた。私も、最近生まれただばかりの小さな娘を抱いていると、なぜだか「かなしみ」がこみあげてしやうがなくなり、そんなわが心にうろたえもしている。だから、悲惨さと神々しさも、実は

ことを咎とされたらしい。また文禄四（二五九五）年、豊臣秀次が「謀反」の罪で高野山へ追放、切腹させられたのち、妻妾子女三十余人がごとく三条河原で斬首された事件はあまりにも有名である。

かと思えば、同じ鴨川の河原が、新天皇即位時の踐祚大嘗祭に際しては、本祭の一か月前に行われる御禊行幸の頓宮設営の場ともなる。

『古事類苑』神祇部所引の「代始和抄」によれば、文徳天皇即位の仁壽元年（八五二）年に御禊の地が鴨川に選ばれ、その後二条河原か三条河原で行われ、おおむね三条河原に固定されるとある。『日本紀略』では、一代前の仁明天皇即位、天長一〇（八三三）年から鴨川に行幸している。吉野裕子の『扇 性と古代信仰』（一九八四年 人文書院）によると、東山天皇即位の貞享四（一六八七）年以降は、河原への行幸自体を廃止したという。

ということとは、一五九五年に秀次の妻妾子女斬首の惨劇が行われた三条河原は、その後も忌避されることなく、新天皇御禊行幸が継続されたということになる。同時代の後陽成天皇の次代、すなわち後水尾天皇即位の、慶長十六（一六一一）年の際にも行われたことになる。確たる史料を得てはいないが、理屈上はそうなる。河原

未分化一つの畏怖心ではなかったか。

山中の寺社が夢を授かる名所となったように、川の流れて洗われるところは、この世と幽冥界とが交流する通路なのである。川中島で合戦が行われるのも、神意の所在を図る賭け事だからであろう。

河原という聖域の奥行

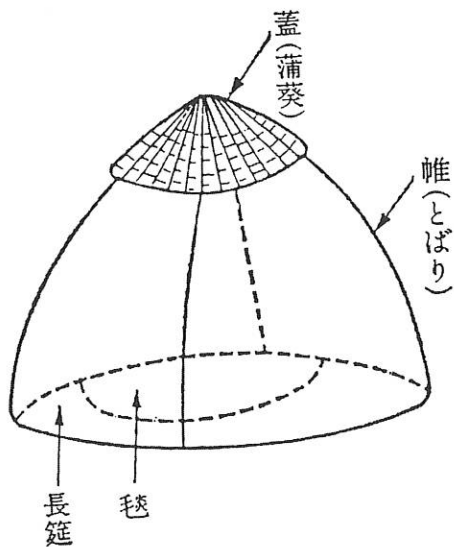
中世期の賤民や雑芸能を生業とする者、また出雲国を始めとする近世期の歌舞伎役者など、河原に住むことや河原で興行することを強制された者たちを、「河原者」とか「河原乞食」などといった。社会的に有益な役割をもたぬ制外者たちを卑しむ気持ちと、憑霊者としての彼らを畏怖する気分との未分化な感性がとらせた措置なのだろう。一般人と共同生活するのが物騒な人々は、同じように物騒で神々しい世界と一つになつていてもらう。

河原や中洲が処刑場となるのも、そうした神秘感の後遺症なのだろう。平将門の首は鴨川の四条河原に晒され、そこから関東へ向けて飛び立ったという。法然上人の高弟安樂房が、鴨川の六条河原で死罪となる図が『法然上人絵伝』にある。後鳥羽院寵愛の女官を出家させた

の聖性とはそれほどまでに、清濁というか、神性と無慘とをあわせ呑む懐深い奥行きのある場なのである。

青山祭は天皇霊更新のトランスフォーメーション

ちなみに新天皇の御禊行幸の儀式は、川に面した頓宮内に設置した「百子帳」というテントのような設備で行われる。吉野裕子による想像図も参照されたい。



百子帳想像図
吉野裕子「扇 性と古代信仰」(人文書院)より抜粋

「代始和抄」では「檜棚をもて頂をおほひて、四方に帷をかけて、前後をひらきて出入するやうに飾りたり」と描写される。ここで想起してほしいのが、先に引用したホムチワケ伝承である（一六四〜一六五）。皇子がやると言葉が発した、と喜んで伴人たちが、「御子をば檜棚の長穂宮に坐せて、驛使を買上りき」とあった。「あぢまさ」とは蒲葵（檜棚）の古名である（『図説草木名彙辞典』柏書房）。

檜棚とはヤシ科の常緑大高木で、アジア熱帯地方やニューギニア、オーストラリア、九州、沖縄、小笠原などに生える（小学館『日本国語大辞典』。「和妙類聚抄」では、葉が樹の先端部に集中して、十余房あり、さらに「二房數百子」と指摘する。「百子帳」の百子とはその辺に由来しているかもしれない。吉野裕子は出典を明記していないが、「百子」を蒲葵（檜棚）の「漢名」としている（前掲書六九頁）。

その葉で葺いたテントとは、まさに青山を連想させるではないか。

古事記本文では「肥河中洲の仮宮」と、「檜棚の長穂宮」とが同一のものかどうか不明瞭であったが、この件に関しては、本居宣長も貴重な証言を提出してくれている。「出雲の」國人の説に云く、垂仁天皇の皇子の、大

社に詣たまふとき、天穗日命の十五世、來日田維命迎奉て、肥川に黒檜橋をわたし、檜棚の木を以て假宮を作り、大御食奉れり、その宮を、長穂の新宮と云り」（『古事記傳』二五卷 傍線筆者）と、おそらくは出雲出身の門人なのであろうか、現地人との伝承として述べている。つまり出雲の人々の間では、「肥河中洲の仮宮」と「檜棚の長穂宮」とが同一物とする意識が明確にある、とわかるのである。

ホムチワケはこうした特殊霊格を備えた存在として描かれてはいるものの、実際には天皇にならず、どこかこれ以降記紀の中には登場しない。現代人としては不遇の皇子と考えてしまうが、古人たちにとってはどうだったのだろうか。

少なくとも、御禊行幸の初見は『日本紀略』大同二（八一七）年十月条、平城天皇による葛野川行幸であるから、和銅五（七二二）年成立の古事記の伝承を、当然意識しているはずだ。にもかかわらず、特にホムチワケにまつわるからと、忌むことはしていない。むしろ、ホムチワケ伝承の意義を積極的に大嘗祭へ移しているとも言える。天皇が南方系の植物をこれほどまでに重視した理由についても興味深い。今は措こう。青山祭とは、天皇靈更新の世界転換でもあったことを、確認する

にとどめる。

青山運歩が日常である

こうしたことから河原や中洲は、生死の特殊状況を体験する場には違いないことがわかった。ときとして生命出現の役割を担出し、また過去の巢穴ともなる。あたかもホワイトホールであったりブラックホールとなったりするかの如きだ。かといってそれを「両義的空間」などと述べるのは、少しばかり話を抽象化しただけのこと

で、解釈したことにはなるまい。それらはすべて、道元の強調する「青山常運歩」という偲のイメージ世界を持っているのである。生命が噴出するの燃焼するのも崩壊するのも、それは個体だけの

営みではなく、天地そのものの遊働であった。天地の遊働が個体や集団の生命遊働であった。そして、遊働することをもって、常（日常）とするのである。

河原・中洲は日常から隔絶した世界のように感じられもするが、実は日常を営む空間そのものの機動性をクローズアップするところであった。

日常とは、物理的に考えても不変ではなく、あらゆる分子の生成と崩壊の同時連続過程である。それを生身で体感すれば、運歩（遊働）するものをもって青山（生命力の横溢）とし、青山の運歩をもって常（日常）と呼ぶことになる。

体感ほ繰り返されると鈍るから、さまざまな具体的演出で人は生きる感覚を洗いなおすのだ。祭りも戦も弔いも、その手段と言える。

短歌

8月号 7月25日発売
定価 830円

（巻頭作品）

雨宮雅子・田井安曇
大島史洋・米川千嘉子
藤岡武雄・辻下淑子
中野照子・大河原惇行
佐々木六戈・大滝和子

三大特集

小島ゆかりの3冊を読む
+ 新作30首

- ◆『ごく自然なる愛』…久々湊 逸子
- ◆『獅子座流星群』…本多 稜
- ◆『月光公園』…江戸 雪
- ◆『自著解説』+ 新作30首
……小島 ゆかり

文語で詠むか 口語で詠むか

- ◆ 総論……栗木京子
- ◆ 文語短歌の魅力
+ 秀歌18首鑑賞…松坂 弘
- ◆ 口語短歌の魅力
+ 秀歌18首鑑賞…梅内美華子
- ◆ 文語と口語の調和した
歌の魅力+ 秀歌18首鑑賞
……中川 佐和子
- ◆ 文語と口語、私の場合
……奥村晃作・香川ヒサ
日置俊次・東 直子

●グラビア&エッセイ● うたびとの時間⑧日高堯子

●●● 好評連載 ●●●

馬場あき子・岡井隆/小高 賢
篠 弘・神作光一・坂井修一
実作レッスン「万竊のとびら」
……俵 万智×一青 竊

巻頭エッセイ……松平盟子
歌壇時評……川野里子
題詠「歩く」発表…雨宮雅子 選
誌上添削教室…田中子之吉
公募短歌館……杜澤光一郎
佐伯裕子・内藤明選

発行：角川学芸出版
電話 03-3817-6981
発売：角川グループパブリッシング
電話 03-3238-8528